

『東坡禪喜集』の成立について

長谷川泰生

はじめに

『東坡禪喜集』九卷^{〔1〕}(明・万曆一八、一五九〇年序刊)は、中国北宋の大家、蘇軾(一〇三六―一一〇二)の禪に関する著述を、明の徐長孺が編纂したもので、日本でも元禄二年(一六八九)に中野伯元により上梓されて以来、主に禅林において珍重されてきたものである。

本稿では、『東坡禪喜集』の成立について、その採録の周辺や作品の内容等から編者の意図を探るとともに、蘇軾が仏教・禅とどのように関わっていたかを官僚文人の視座から考察して、本集の意義を明白にしてみたい。

一

蘇軾(字は子瞻。東坡居士と号す。以下、本稿では東坡と表記)は、周知の通り、政治家としては科擧及第後、翰林学士・兵部尚書等の高官を歴任し、文章家・詩人としては『唐宋八大家文』・『唐宋詩醇』等に名を連ねる名家であり、又書画芸術においても造詣が深く、いずれも第一級の名声を博している官僚文人大家であって、日本でもよく

その名を知られている。

また思想面では、莊子や仏教、道教への傾倒が指摘されているが、特に仏教については、官僚として政争の渦中であつて、左遷流謫の憂き目に遇うたびにその関心を深めていったようである。そのようすを具体的にみてみると、まず自ら志願して転出した杭州では、当時繁栄していた現地の寺院を巡り、住持と語つて親交を深めた。²⁾更に、一度は死罪を覚悟した³⁾上での流謫地黄州では、自ら寺院に赴き、香を焚き黙坐して自己を省察するといった信仰生活に及んで、⁴⁾仏教への関心を深めていったようである。特に禅については、自ら東坡居士と号して在家の仏教信奉者であることを表明し、東林常総（一〇二五〜一〇九二）や仏印了元（一〇二二〜一〇九八）等の禅僧と親しく交流していた。例えば常総とは、盧山の東林寺において「無情話」を論じて省悟したとされ、

溪声便是広長舌 山色豈非清淨身

夜来八万四千偈 他日如何举似人⁵⁾

の偈は、同じく盧山での作、

横看成嶺側成峰 遠近看山了不同

不識盧山真面目 只緣身在此山中⁶⁾

と共に有名であり、東坡はこの時の因縁から常総の法嗣とされる。⁷⁾

また仏印とは、本集にもみられるように深く交際し、「東坡輪玉帶」の条における答話はまことに有名である。

このような交流は、東坡が高級官僚僚であつたこともあつて禅林の側からも歓迎され、彼の詩集や書がそのまま日本にも舶載されて、わが国の禅林でももてはやされたのであろう。

二

さて、このような東坡の仏教に関する著述は、『蘇東坡全集』一一〇卷⑧（『前集』四〇卷、『後集』二〇卷、『統集』一二卷、『奏議集』一五卷、『外制集』三卷、『内制集』一〇卷、『応詔集』一〇卷。以後『全集』と表記）に釈教三卷として六十条余りがまとめて採録されているが、その他にも散見するものも含めて禪に関するものを集めたのが、この『東坡禪喜集』である。

ところで、編者、徐長孺（字は孫益）については残念ながら詳しいことはわからないが、序文を書いた陳繼儒（一五五八〜一六三九）・陸樹声（一五〇九〜一六〇五）、跋文を書いた唐文献等が皆松江華亭の進士であり、当時彼らと交遊のあった地方人士であったと思われる。

ここでは、編者の採録の仕方について検討してみることにするが、まず目録の章立ては、巻一が頌、巻二が贊、巻三が偈、巻四が銘、巻五が記、巻六が書諸経後、巻七が序伝文疏、巻八が禪喜記事、巻九が仏印問答語録となっている。さらに細目の内容と『全集』の目録とを検討すると、巻八と巻九を除いて全て『全集』に出所があることがわかり、特に『前集』巻四〇の釈教、『後集』巻一九、巻二〇の釈教、『統集』巻一〇の頌・贊、巻一二の記・伝・偈が大半を占めている。逆に『全集』の側から言えば、『前集』巻四〇は二十三条中の二十二条、『後集』巻十九は二十条全て、巻二〇は十七条中の十六条が採られており、殆どそのまま採録されたということになる。また『後集』では、巻一〇の頌・贊が四十二条中の十八条、巻一二の記・伝・偈が四十四条中の十八条（但し偈は十二条全て）と、凡そ半数が採録されている。

これら以外は『全集』中からわずかず採られているのであるが、釈教巻のように殆どそのまま採録されていないところに編者の好みが表われていると思われるので、ここで少し詳しくみてみよう。

まず、釈教巻以外で明らかに禪と関連があると思われる作としては、『興国寺浴室院六祖画贊』（『後集』巻一八）、「祭

竜井弁才文』、『後集』卷一六)、「答畢仲举書」、『前集』卷三〇)が挙げられ、それぞれ大鑑慧能(六三八く七一三)や、大覚懷瑾(一〇〇九く一〇九〇)・明教契嵩(一〇〇七く一〇七二)等について記されているが、特に「答畢仲举書」では、東坡自らの禅の理解について陳襄(字は述古)と比べて次のように語っている。

往時、陳述古好論禪、自以為至矣。而鄙僕所言為淺陋。僕嘗語述古、公之所談、譬之飯食、竜肉也。而僕之所学、猪肉也。猪之与竜、則有間矣。然公終日說竜肉、不如僕之食猪肉美而真飽也。不知君所得於仏書者果何耶。云々

……

つまり、陳襄が竜の肉に喩えられるような禅の高尚な教理を説くよりも、安価で美味な豚肉のように、身近で現実的な教えを身に付ける自分の方が余程ましであると言うのである。これはまさに東坡が自ら禅を理解しようとしていた一つの証しとなるものであろう。

この他、「薦誠禅院五百羅漢記」(『前集』卷三三)、「菩薩泉銘」・「大覚鼎銘」(『前集』卷二〇)、「宝月大師塔銘」(『後集』卷一八)等は、基本的にそれぞれの記や銘であり、また禅僧ではない僧との交流を記したものであって、いわば仏教一般について誰にでも興味をもたせるような記述が多いと思われる。

以上のように、巻一から巻七までについては、『全集』の积教三卷殆ど全部と『続集』中の頌・賛・記・銘から選んで採録し、さらに編者の見識により教条を加えたものといえよう。

さて次に巻八の禪喜記事は、文字通り東坡の事蹟のうちで第三者が書いた禅に関するもの二十七条を集めたものであるが、宋・釈惠洪の『冷齋夜話』、宋・何遠の『春渚記聞』や明・田汝成の『西湖遊覧志余』等のいわゆる筆記小説類から多く採られている。恐らくは当時編者が目にした書物から選んだものと思われるが、いかにも「禅」という言葉が明確にみえるものも多く、

・悪業相纏四十年、常行八捧十三禅。(『冷齋夜話』)

・ 汝試參禪。

〔西湖遊覽志余〕

・ 大千都是一禪床。

〔宋・阮閱撰「詩話総亀」〕

・ 世上無眼禪、昏昏一覺睡。

〔総・闕名撰「百斛明珠」〕

などがそうである。

また前述の「溪声便是……」「横看成嶺……」の二偈も『冷齋夜話』などから引用されているが、東坡自身の記述でない分、客観的に禪との関わりが示されている感じがする。しかしながら、全てが禪に関するものとは言い難く、また平話雑録的な性格から俗陋なイメージを受けるものすらあつて、第二次資料ということも踏まえて、あくまで側面に東坡と禪の関わりを理解するための部分と言えよう。

さて、最後に巻九の仏印問答語録については、序文を書いた陳繼儒が編んだ『問答録』一卷（宝顔堂秘笈本）があつて、題目の違いを除けば、全四十条の内、初めからの三十一条がそのまま採録されている。また、その他の条については、東坡撰といわれる『艾子雜説』や『調謔編』などのような短編集から採られたと思われる。しかしながら、『問答録』以下これらの書物は偽託書の可能性が高く、¹⁰『東坡題跋』や他の真本に載る記事（「遊飛來峰天竺」「東坡輸玉帶」）以外は怪しいものと言わざるを得ない。また、仏印側の資料にも「玉帯」の話の他は見出せないので注意が必要である。ただ、話の内容としては非常にユーモラスな禪的答話が多く、読者にとっては頗るおもしろいものである。

以上、目録を中心にみた採録のようすについては、巻一から巻七までは、『全集』の釈教巻をもとに偈・贊・記・銘などを選んで加えたものであり、巻八は当時流布していた筆記小説等から東坡の禪に関する事蹟を集めたもの、巻九は偽託の可能性はあるが、『問答録』を中心に当時の俗書から滑稽な小品を集めたものということが出来る。

三

さて次に、本集に採録された文章が内容的にどの程度禪や仏教に関わりがあつて、東坡のどのような仏教志向を表わしているのかを検討してみたい。

まず巻一の頌については、巻頭の「釈迦文仏頌」、「阿弥陀仏頌」は共に亡妻、亡母への弔意を示すもので、そのために釈迦文仏や阿弥陀仏の画を寺院へ寄進して亡者の冥福を願うだけの内容となつている。このことは巻二の贊においても表われており、仏教的ではあるが特に禪を信仰するという感じではない。その他「十八大阿羅漢頌」、「觀世音菩薩頌」、「石恪画維摩頌」などは、各々作られたり寄進されたりしたいきさつを述べて頌した仏教一般的なものであり、「東坡羹頌」や「食豆粥頌」は東坡の食物の嗜好を示すものである。

故に特に禪的な関わりが感じられるのは、「禪戲頌」、「答子由頌」、「醉僧図頌」の三条ぐらいで、

・ 勘破天下禅和子（「禪戲頌」）

・ 人生得坐且穩坐、却却馳走覓什麼。

今年且病東禅屎、明年去拽西林磨

（「醉僧図頌」）

といった記述が目には止まるにすぎない。

巻二の贊については、巻一とは少し違い、二十八条の内、十二条目の「興国寺浴室院六祖画贊」以後の部分は、馬祖廬公、東林第一代広慧禪師、金山長老宝覺師、浄因浄照臻老等の禅僧に対する贊文と、禪に関わりのある内容の「鬻體贊」、「磨衲贊」、「小篆般若心経贊」等の作品が大半を占めているのである。例えば「小篆般若心経贊」では、

世人初不離世間法、俗学出世間法、拳足動念皆塵垢。而以俄頃作禅律。禅律若可以作得、所不作処安得禅。

と言って、世間の輩が俄かに禪を極めようとしても不可能であると述べている。又、「鬻體贊」では、

黄沙枯觸髅、本是桃李面。

而今不忍看、當是恨不見。

業風相鼓轉、巧色美情盼。

無師無眼禪、看便成一片。

と賛して、ある程度禪を理解しているような印象を受ける。

また前半の条については、巻一の頌と同様で、「阿弥陀仏賛」、「観音賛」、「薬師瑠璃光仏賛」は、いずれも身内の冥福を祈ったり、病気の治癒祈願の為のものであり、その他の条も概ね寺院に寄進された仏像や仏画の因縁と賛文であつて、仏教的な内容であるが特に禪に関わる感じではないと思われる。

巻三の偈については、巻一と巻二の前半と同様に仏教一般に関するものと、仏像・仏画への賛偈が大半であり、禪に直接関わりそうなのは、仏印との玉帯をめぐる話で有名な、

百千灯作一灯光 尽是恒沙妙法王

是故東坡不敢惜 借君四大作禅床

の「戲答仏印偈」と「送海印禅師偈」、「送寿聖聡長老偈」ぐらいであろう。

巻四の銘では、十八条の内、「法雲寺鐘銘」（法雲法秀）、「談妙齋銘」（南華重弁）、「卓錫泉銘」（大鑑慧能）、「大覚鼎銘」（浄因懷瑾）が、禅僧と直接関連のある事物の銘文であるが、他はやはり仏教一般的な内容である。

巻五の記、全十二条は比較的長文が多いが、「南華長老題名記」と「黄州安国寺記」は仏教や禅にかなり深く関わる内容であると思われるので少し詳しくみてみたい。「南華長老題名記」では、まず初めに、

学者以成仏為難乎。累土画沙童子戯也。

皆足以成仏。仏為易乎。

と言つて、仏教を学ぶ者はいわゆる頓悟成仏することを難しいと考えるが、泥遊びをしたり砂に絵を画いたりするよ
うな童子には却つて易しいことだと述べる。そして、

方其迷乱顛倒、流浪苦海中。一念正中、万法皆具。及其勤苦功用、為山九仞之後、毫釐差失、千却不復。嗚呼、
道固如是也。豈獨仏乎。云々……。

と言つて、道というものは、無我夢中で苦海の中に精進するうちに備わるもので、仏教に限つたことではないとする。
次に孟子の穿踰の喩^①を挙げて、賢人君子と雖も言うべきに言わず、言うべからざるに言つて人の心を無理に引きつけ
るのは、壁に穴を開け垣根を乗り越えて忍びこむようなもので、儒教においても仏教においても同様に慎まねばならな
いと戒める。その後で、南華寺の歴史に触れて、六祖慧能の伝法が散じて律寺になっていたのが、天禧三年（一〇一
九）に禅寺に復したいきさつを述べる。そして十一世たる明公長老より請われて、こうして題記を書いていると言ひ、
最後に、

万為論儒積不謀而同者以為記。

と結ぶ。これは、禅と律、儒と釈というような対立的な考え方ではなく、融合論的な東坡の宗教観の一端を呈するも
のといえよう。

次に「黄州安国寺記」は、東坡四十四才の時に、彼の作つた詩文が朝廷の名譽を傷つけたという罪状により収監さ
れ、辛うじて極刑を免れて黄州に流謫された時の作であるが、やっと当地に着いて宿舎や衣食の目処が立つたところ
で自ら深く反省し、

道不足以御氣、性不足以勝習。不鋤其本而耘其本、今雖改之、後必復作。盍歸誠仏僧、求一洗之。

と、仏教に帰依して根本から洗い清めてしまおうと決心する。普段は剛氣な東坡もさすがにこたえたのであろう。さ
らに、よく知られているが、次の如く安国寺に出入りするようになる。

得城南精舎、曰安国寺。有茂林脩竹、陂池亭榭。間一二日輒往、焚香默坐、深自省察。則物我相忘、身心皆空。求罪垢所從生而不可得。一念清淨、染汗自落、表裏儵然、無所附麗。私竊樂之、且往而暮還者、五年於此矣。

「香を焚き默坐して深く自ら省察し」、「物我相い忘れ、身心皆空なる」境地を得た東坡は五年に亘つてこの行為を続する。この文からは、ひたむきに仏教、特に禪的なものに頼ろうとする東坡の姿が明確に窺われ、ここに仏教信仰の深まりの一つの契機があったと思われる。

これら以外の条については、東坡の仏教観も少しは見られるが、それぞれ閑や経蔵、羅漢や札拜石について建立の因縁を記すにすぎない。

巻六の書諸経後の八条は、『全集』中だけでなく、『東坡題跋』にも全てみえるものである。まず冒頭の二条、「書孫元忠所書華嚴経後」、「書若達所書経後」は、共に手写された经文の字が同じ調子で統一して書かれていることを賛え、それが「忘我を以つての故」だという。どちらかというところ、内容よりも写経の字体についての批評が主体である。

次に「書金光明経後」、「書楞伽経後」、「金剛経跋尾」は、それぞれの經典への跋文であるが、そこにも著しく禪的ではないが東坡の仏教に関する考え方が垣間見られる。例えば「書金光明経後」では、東坡の幼い息子、蘇過が母の王氏の死に遇い、『金光明経』を写経してその冥福を祈ろうとしたが、「この經典に書かれてあることが全て真実か嘘か話かわからない。」と尋ねてきたのに答えて、東坡は張方平の言葉を引いて次のように言った。

仏乘無大小、言亦非虚実。顧我所見如何耳。万法一致也。我若有見、寓言即是実語。若無所見、実寓皆非。

このように、仏の話は喩え話でも真実の話でもないことを教え、さらにこの後で流水長者や薩埵王子の例¹²を挙げて、他への施しを日常的に行うことで仏の道を修得して悟りも成就し、母親を救うことができるのだと論じている。また、「書楞伽経後」では、

楞伽阿跋多羅宝経、先仏所説、微妙第一、真実了義、故謂之仏語心品。祖師達磨以付二祖日、吾觀震旦所有経教、

惟楞伽四卷可以印心。祖祖相受、以為心法。

と述べて、達磨が慧可に『楞伽經』を伝えた話を挙げて大いに賛嘆している。

さて更に禅との関わりが深いと思われる条が「書柳子厚大鑑禪師碑後」と「書黃魯直季氏伝後」であろう。まず前条では、唐代、柳子厚（宗元）は南遷された時に、「曹谿」「南嶽」などの碑文を作ったが、現在南華寺では石に刻む人がいないので、重弁が東坡に碑文を依頼したといういきさつが記されているのであるが、大鑑禪師つまり六祖慧能の碑文を依頼するということは、重弁もまことに東坡の禅仏教徒たることを認めていたのではないだろうか。次に「書黃魯直季氏伝後」では、まず、

不極不至、心地不淨。如飯中砂、与飯皆熟。

と言つて、雪峰義存の飯中の砂の話を引き、

善哉仏子、作清淨飯。淘米去沙、終不能尽。不如即用、本所自種。元無沙米、此米無沙。亦不受沙、非不受也。

無受処故。

と述べて、仏の作った清淨な飯を炊くのに、砂を全部取り除くことはできないし、また元来自分で植えた米には砂を受け入れるところなどないのだと言う。

このようにこの二条には禅との関わりがあると思われるが、この他の条はやはり仏教一般的ないしはあまり関係がないものである。

次に卷七の序伝文疏、十条においては、「答畢仲舉書」、「南華長老重弁師逸事」、「請淨慈法涌禪師入都疏」の三条が禅との関わりが深いと思われる。「答畢仲舉書」は先述の通り、自らの禅の理解について述べたものであるが、他の二条では禅の先師の逸話を引いて論じている。まず「南華長老重弁師逸事」では、明教契嵩と天台の海月法師慧弁（一〇一四〜一〇七三）について次のように語る。

契嵩禪師常曠人。未嘗見其笑。海月慧弁師常喜人。未嘗見其怒。予在錢塘親見二人、皆跌坐而化。嵩既茶毘、火不能壞者五。海月比葬、面如生且微笑。乃知二人以曠喜作仏事也。

つまり契嵩は「曠」を以て、慧弁は「喜」を以て教化したが、二人共死後に至るまで肉体が存したことを述べ、さらに、

世人視見如金玉、不旋踵為糞土。至人反是。余以是知、一切法以愛故壞、以捨故常在。豈不然哉。

と言つて、彼らのように道を極めた人は、世間の人とは逆に肉体への執着が無いので、却つて常に存在し続けることがわかったと言う。

これに続けて、嘗て相見した南華寺の重弁長老のことに話が及び、重弁が入寂後七百日も経つてから移葬される時、全身まるで生きているようで、衣は芳香を放っていたことを弟子達から聞いた東坡は次のように言う。

弁視身為何物、棄之尸陀林以飼鳥何有。安以寿塔為。云々……

つまり重弁も、契嵩や慧弁と同様、自身の肉体に執着しない道を体得した人であったから、何処に葬られても別に構わなかったに違いないと述べるのである。この条は六祖由縁の南華寺にあつて、契嵩等を登場させ、深く禪と関連する内容だと思われる。

次に「請浄慈法涌禪師入都疏」は、浄慈寺の法涌禪師を入都させることを奏上する表白文であるが、冒頭で、京師禅学之盛、發于本・秀二公。

と言つて、雲門宗の慧林宗本、法雲法秀の名を揚げてから、その後を継ぐべき人物として法涌を推挙している。

この他、「祭竜井弁才文」では、東坡の禅僧だけにこだわらない僧との交流が記され、杭州通判時代を振り返つて次のように言う。

我初適呉、嘗見五公。講有弁・臻、禪有瑾・嵩。

つまり、初めて赴任した時の杭州では当時仏教界が全盛を極めており、各宗各派の高僧が集まっていて、東坡はその内の五公に会ったという。五公とは、天台宗の海月法師慧弁と弁才法師元浄（一〇一―一〇九一）、実相法師梵臻、禪宗の大覚懷瑾と明教契嵩を指すが、それぞれ書簡や詩の贈答や、相見といった交流が東坡と行われたようで、既出の条や他の作品にもよく見受けられる。これにより、東坡の杭州時代の僧侶達との交遊がよくわかるのであるが、唯一人生存していた弁才が遷化したことを深く悼んだのがこの文章である。

その他は、「僧田沢伝」が奇異な僧侶の伝記であったり、「怪石供」、「後怪石供」が当時の文人や禅僧の間で盛んであった、石を鑑賞する趣味の「怪石」を供物として仏印に贈りたいきさつが記してあったり、仏教的というよりも物語としておもしろく読める内容となっている。

さて次は巻八の禪喜記事についてであるが、前述の通り本人の記述ではない第二次資料であるので、客観的である一方、東坡の真意が伝わりにくいということも念頭に置く必要がある。内容的には、『冷齋夜話』や『西湖遊覽志余』等からの引用が多く、全般に記事としての面白味があっても、東坡の仏教観を示すような思想的なアピール性を感じる場面は少ないようである。例えば冒頭の一条は『冷齋夜話』（『夢迎五祖戒禪師』）からの引用であるが、東坡の弟の蘇轍（字は子由）と雲庵と聡禪師の三人が、同時に五祖戒禪師を迎える夢を見たという。それを聞いた東坡は、

軾七八歳、常夢是僧。又先妣方孕時、夢一僧來托宿。云々……。

と自らの体験を語り、幼い頃、自分は僧侶の生まれ変わりだと思っていたという。話としてはおもしろいものであるが、この内容からは特に禅的な思想は感じられないと思われる。

また『西湖遊覽志余』には杭州に守たる時、琴操という名の妓女が仏教に通じているということを聞いた東坡が、西湖に遊んだ時に次のように彼女を自分に参禅させるという話がある。

我作長老、汝試参禅。子瞻問曰、

何謂湖中景。対曰、落霞与孤鶩齊飛、秋水共長天一色。

何謂景中人。対曰、裙拖六幅湘江水、髻挽巫山一段雲。

何謂人中意。対曰、随他楊學士、鼈殺鮑參軍。

如此究竟如何。子瞻曰、門前冷落車馬稀。老大嫁作商人婦。琴操言下大悟、遂削髮為尼。

こうして琴操は落髮してしまふというのであるが、誠にお話としては面白く、仏教や禪にこれから興味を持つる者には親しみやすいであろう。

その他の条も概ね同様で、思想的なものは少々薄く感じられるが、第三者により客観的に記述されているので読む者には理解しやすい内容である。

最後に巻九の仏印問答語録については、約四十条に亘って仏印との親しい交遊の様子を小話にしたものであるが、前述のように偽託の可能性が高い作品が多く、あまり参考にはできないかもしれない。しかし、内容的には低俗であるが全編まことにユーモアに溢れ、且つ極めて禅的な機知に富んだ得意即妙の答話であつて、東坡の作ということにこだわらなければ、禪の入門者や仏教に関心のない者にも親しみやすく抵抗なく受け入れられるであろう。例えば「千字文謎」では、次のようである。

仏印持二百五十錢示東坡曰、与爾商此一箇謎。東坡思之。少頃謂仏印曰、一錢有四字、二百五十箇錢乃一千箇字。莫是千字文謎乎。仏印笑而不答。

つまり、千字文の謎を商量せんとする仏印に、東坡は一錢貨には四字が書してあるので、二百五十錢にて千字文になると言うのであるが、正に駄洒落か頓智話のような答話である。

又、酒を飲みながら「令」という一種の言語ゲームのようなものをよく行ったようで、例えば「急急令」では、黄山谷、仏印と三人で飲んだ時に、東坡が「急急令」を出し、まず自ら、

急急急穿靴、水上立走馬到安邑、走馬却回来。靴裡猶未湿。争幾多二三分。と言う。次に山谷が、

急急急連箭射、粉牆走馬到南場、走馬却回来。箭頭未点牆。争幾多二三尺。と答え、さらに仏印が、

急急急娘子放個屁走馬到西市、走馬却回来。孔門猶未閉。争幾多三五寸。

と、たいそう下品だがユーモラスに答えている。このような答話は、後代明の『笑禪録』（潘游竜撰、説郭号四十五所収）などと軌を一にするもので、問答録というよりは大衆向けの笑話のようである。

ところで、次の二条は類似の話が『東坡題跋』等にもあつて偽託ではなく、又仏教色の濃い作品でもあるので紹介しておこう。まず「遊飛來峰天竺」（『東坡題跋』卷一では「改觀音經」）では、仏印と靈隱寺の飛來峰に遊んだ時に、手に數珠を持った觀音菩薩像を見て、東坡が「何故、自分自身の仏号を念じているのであろうか」と不審に思つて仏印に尋ねると、「人に求めるは己れに求めるに如かず」と仏印が答えて東坡は納得したという。更に東坡が、『觀音經』の

呪咀諸毒藥、所欲害身者、念彼觀音力、還著于本人。

の一節が、人の難を免れさせて他の一命を害するのは仏の意に添っていないとして、「還著于本人」を「兩家都没事」に改めた方がよいと言つと、仏印は大いに賛成したという。

この他、「東坡輪玉帶」の話はよく知られているが、東坡が仏印に「和尚の四大を借りて禪床と作さん。」と言つたのに対し、仏印が、「山僧が四大本と無。五蘊有に非ず。内翰何れの処に坐せんと欲す。」と答えると、東坡は返答ができずに自分の玉帶を仏印に与え、仏印も返礼に衲衣を東坡に贈つたという内容で、次の東坡の二偈とともに有名である。

病骨難堪玉帶圍 鈍根仍落箭鋒機

欲教乞食歌姫院 故与雲山旧衲衣

又、

此帶閑人如伝舎 流伝到我亦悠悠

錦袍錯落真相称 乞与狺狂老万回

このように仏教色豊かで禅にも関わりの深い話も収まるが、編者としてはこれらの話も含めて全体として誰にでも禅機を楽しめるようなユーモラスな内容にしたかったのではないだろうか。

おわりに

以上みてきたように、『東坡禪喜集』は、その採録自体は『蘇東坡全集』や『問答録』を基に、編者の見識により若干の追加をしたに止まるが、その内容については、仏教一般から禅の思想に至るまで広汎に仏教色豊かなものになっている。そこには東坡の仏教信仰の深淺の度合いや、僧との交流の様子が身近に描かれており、時期や場面によつて異なるが、東坡はかなり深く仏教を信仰し、禅についてもよく学び理解していたであろうことが特に禅僧との交流の中に読み取れる。

しかしながら、東坡の膨大な量の詩作の中から仏教、禅に関するものが殆ど採られていない点や、『東坡題跋』等には他にも『禪喜集』にふさわしい作品が数多くみられること¹⁸から、東坡の禪喜に関するオールマイティな書物とは言い難いかもしれない。けれども、唐宋古文の担い手であった東坡のすぐれた文章と相まって、漢文のテキストにもなり得るもので、一概に俗書と決めつけるのではなく、禅、仏教の入門者への手引き、エッセイ集とでも捉えれば、日中禅林において喜ばれてきたことも大いに首肯でき、この書の意義もさらに高まるであろう。

註

- (1) 別に天啓元年（一六二二）に凌濛初が編した十四卷本もあるが、本稿では徐長孺の原刊本を底本とした。身近には禪林叢書第一編所収本がある。
- (2) 本集巻七、「後集」巻一六、「祭竜井弁才文」にみえる。
- (3) この筆禍事件の詳細は、宋・朋九万撰の「烏台詩案」にある。
- (4) 本集巻五、「前集」巻三三、「黄州安国寺記」にみえる。
- (5) 『前集』巻一三「贈東林総長老」詩。
- (6) 『前集』巻一三「題西林壁」詩。
- (7) 『嘉泰普燈錄』「五燈会元」等の僧伝に常総の法嗣として記載されている。
- (8) いわゆる「七集本」であるが、本稿では世界書局版を底本にした。
- (9) 巻六、書諸経後については『東坡題跋』にも全て出所がある。
- (10) 林語堂氏が『蘇東坡』（合山究訳・明德出版）で指摘するように、二、三の例外を除いて、これらの本に載る記事は、東坡の『全集』や『題跋』、『志林』等の著述の中に見当たらない。
- (11) 『孟子』尽心篇にみえる。
- (12) 流水長者は、池の水が干上がって死にかかっていた魚を、二十頭の象に水を運ばせて救ったという話であり、薩埵王子は釈迦が菩薩行をした時の名で、わが身の肉を飢えた虎に施したという話。ともに『金光明經』巻四にみえる。
- (13) 雪峰が洞山下に在って飯頭となり、米を淘ぐ時に洞山が、「沙を淘いで米を去るか。米を淘いで沙を去るか。」と問うと、雪峰が、「沙米一時に去る。」と答えた話。『五燈会元』巻七等にみえる。
- (14) 書簡では「与大覚禪師蓮公」（『統集』巻四）、「与弁才禪師三首」（『統集』巻六）や、仏印への書簡が多く、詩では「次弁才韻賦過溪亭」（『前集』巻一八）や、「弔天竺海月弁師三首」（『前集』巻五）などがある。又、弁才や海月の真贊、懷瑾の祭文なども東坡が書いている。
- (15) 竺沙雅章「蘇軾と仏教」（『東方学報』京都第三六冊）には、さらに詳しく論じられており、本稿でも大いに示唆を受けた。

- (16) 『禪林僧宝伝』巻二九、雲居仏印元禪師章にも同様の記事がみられるが、異同がかなりある。
- (17) 『玉帶施元長老』(『前集』巻一四)
- (18) 長谷川昌弘「題跋よりみたる宋代禪」(『印度学仏教学研究』第四四巻第二号)においても『東坡題跋』には特に多くの禪に関わる篇があると指摘されている。